

頁)を採つた所には、縦ひ著者の階級的な立場を一應認容するとしても、尙多くの反省せらるべき餘地が残されてゐる。實際第二章以下の敘述に當つても、先づ著者が「必讀の書」と稱するものを選択し、其處に盛られた色とりどりの問題について思ひ出づるまゝに馳驅してゐる觀がある。是は正に堂々巡りである。本質的には著者が自ら榮ある門出の血祭に上げたものへと再び迎り着いて了つたのである。史學史とは何ぞや、清々なる立場が自學ある體系を與へるであらう事を今後の著者に期待する。

三には又、國史に對する著者の基礎的體驗である。先の史書解題が、史學史として現代から脱落した一面の理由はその文獻學的解釋に由來する理解の未熟さにあつた。近世的儒教、國學とは何か、中世的佛敎的世界觀は如何なる構造を持つものであるか、等の問題に深き理解を持つ事は、今日の史學史研究者が前進すべき一方の血路である。今は本書の細部について詳述する事は避けるが、それにしても、佛敎—宿命的因果論—末世觀といふ風な、常識の段階に於ける解釋は、十分に憤むべきであらう。

本書の根底には階級的な精神があり、古き者をたぐり寄せる立場には史的唯物論が在る筈である。著者にとつて、史學史が、問題史的な形に於て學問發展の歴史を主張する事は、果して承認すべからざる考であらうか。ともあれ本書は、日本史學史の進歩の過程に於て、一の試金石たる役目を擔ふものであらう。(自揚社發行、菊判三三三頁、一圓五〇錢)。(内藤)

## ○日本村落史概説

小野 武 夫著

我農民の生活舞臺たる村落の研究は國民經濟史上に於ける重要題目であるばかりでなく、目前の農村問題、殊に農村經濟の共同組織化運動の歴史的智識として大なる使命を帯ぶるものである。故に日本村落の概念的記述は一方銘々の郷土に於ける天然的、社會的並に經濟的事物に對する認識力を高めしめると共に其認識によつて得たる智識を如何に農村實生活に應用すべきかを示す役にも立つものでなければならぬ。——著者は本書の冒頭に於いてかやうに述べてゐる、まことに現今に於けるあらゆる問題はその解決の方法を歴史的なる智識の中に求められようとしてゐる中にもその要求の我が農村問題に於けるが如く切なるものは少いであらう。蓋しそは單に少數爲政者の必要たるばかりでなく實に國民の大多數が等しく自個自身の問題として解決を迫られてゐる問題であるからである。この書はかやうな一般の要望に應へんが爲に著者が諸方に於て試みた講演を機縁として書かれたものであつて、その全體は左記の六編より成つてゐる。即ち一、政治村落史、二、自然村落の發生、形態、組織並に生長、三、村落の共同生活様式、四、村落文化の交流性、五、明治維新と村落制度、六、村落生活十考の六つであつて、その講述の態度は、著者の以て村落史學の三方面とするところの社會經濟史學、地理學及民族學の三者いづれの方面にも偏することなく、よくそれら各方面の既往の研究業績

を参照しつゝ、著者自身の所見を述べてゐるのは一般概説書としては極めて穩健な立場であると思ふ。然も隨所に引用せられた文書資料等の殆どすべてが著者自身によつて採訪せられたものであること、流石に多年實地調査に従事せる人の著であることを思はしめる。その調査旅行中の感想や所見を蒐録した第六編を除き、爾餘の五編にはそれ／＼その編末に簡単な内容の總括が揚げられてゐる讀者に對すのもる親切であると思ふ。(四六版四八三頁、東京岩波書店發行、定價二、三〇)(柴田)

○滿洲國安東省輯安縣高句麗遺蹟

日滿文化協會刊

滿洲國の輯安縣といつただけでは其の地點など直ちに想ひ起さぬかも知れぬが、廣開土王の碑の所在といつたなら多數の人々は頗く筈である。平壤に遷都する以前高句麗は、三世紀にかけて、鴨綠江中流北岸、普通に通溝と呼ばれて居る地に國都をおいた。此處が即ち輯安縣である。明治三十八年鳥居博士が踏査されたいで、佛の故シヤワンヌ教授、我が故關野博士等が赴いて以後、約二十年間、匪賊の巢窟として全く學術的な調査の届かなかつた處に於て、昭和十年五月壁畫のある二古墳が發見され、これに據つて再び學界の一部に異常の興味を惹くこととなつた。本書は同年親しく此地を訪ふて遺蹟を調査された池内博士の執筆になる。其の内容は先づ通溝平野の地理的狀況を舒し、更に曾つて學界を賑はした丸都・國內兩城問題に就いて考へ、兩城同處説を以つて鐵

案とする旨を強調され、次いで同平野中に存する遺蹟即ち丸都城・丸都山城址・廣開土王碑等を略説しかくて古墳のことに及び其の構造を述べ、石塚と土塚の二種あることを擧げ、「角抵塚」「舞踊塚」と命名したものの等新發見の壁畫古墳を紹介され、最後に石塚と土塚との年代觀と陵墓の比定とに及んで居る。

本書には猶北平清華大學教授錢稻孫氏の譯文と三十三葉の圖版を輯めて居る。本文は要領よくまとめられて居るが著者自らも云はれる如く簡略の憾がないではない。然しこれはやがて發刊される可き詳細な報告書に期待することとし、三十三葉の圖版と共に「大いに學界を益するものとして薦め度い。無慮數萬と稱せられる古墳群の寫眞を一見するならば、恐らく何人も古墳調査の興味が已に樂浪から輯安へ遷りつゝあるの感ぜざるを得ないであらう。又、角抵や舞踊その他の壁畫を通じて高句麗人の風俗や生活を窺ふことが出來るとすれば、四神や唐草文等の壁畫を通じては六朝文化との關係が推測される。日滿文化協會の刊行物としては蓋し適宜なものである。但し本文の翻譯に就いては譯文の如何は問題外として、譯者は滿洲國人であつて欲しかつた。菊版、座右寶刊行會發賣。(小野)

○西洋法制史講義

西本 穎著

——獨逸私法史——

本書は、本學法學部に於て西洋法制史を講ぜらるゝ西本助教の近業であつて、著者自ら本書の冒頭に云はれる如く「西洋法制